The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エルンスト・アントン・ニコライの想像力論について
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2004, 4, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77693
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エルンスト・アントン・ニコライの想像力論について

福田　覚

啓蒙主義時代の医師エルンスト・アントン・ニコライは、「人間の身体に対する想像力の作用についての考察」[1]という論考を書き残している。彼がこれを書いたハレという街は、啓蒙思想の中心地であり、また、その融合の場所でもあった。このテクストは、医学に対する哲学の影響を示す格好の事例である。本稿では、こうした精神史的関心からこの文献を取り上げる。このテクストの改版には、医学者であるニコライがスタンダードな啓蒙主義哲学を吸収していく過程も映し出されていると思われる。ニコライの想像力論が医学と哲学の接点に存在しえたのは、想像力という能力が、広い意味で、身体と精神の境界領域に位置付けられていたからという言い方もできるだろう。そうした想像力についての議論に着目することで、この時代における医学的な言説と、学問横断的なパラダイムでさえあったヴォルフ哲学との関係を探っていきたい。

1　ニコライの人物像

ニコライは、「1750年頃のハレの医学を代表する重要な啓蒙主義者」[2]である。1722年9月7日の生まれで[3]、1740年にハレ大学に入学している。1740年と言えば、1723年にプロイセンから追放されたクリスティアン・ヴォルフ（1679-1754）が再びハレに戻った年である。ニコライのアカデミックな歩みは、ハレ時代とイエナ時代に分かれる。ハレ大学で医学を学び、とりわけヨハン・ハインリッヒ・シュルツェ（1687-1744）やフリードリッヒ・ホフマン（1660-1742）と緊密な間柄となって、両者の晩年の研究に積極的に参加することになる。彼はホフマンのところに同居することを許され、ホフマンの死後も恩師の家にその息子とともに住んでいたようである[4]。1745年に、医学の博士号を受けるとともに、私講師として教授資格を得る。1748年には最年少の員外教授となっているが、これは名誉職的な性格のものであった[5]。その後、1758年にイエナ大学に移って、理論医学の分野で正教授となり、翌1759年には、ヨハン・クリスティアン・シュトック（1707-1759）の死によって化学と臨床医学の教授にも就任している。そして、80歳を目前にして1802年8月28日に亡くなるまで[6]、それらの地位に留まっていた[7]。

ニコライの学問的な姿勢には、時代の機微を感じ取った上での立場選択があるという見方が一般的である。ADBにおけるアウグスト・ヒルシュの記述では[8]、当初は、ホフマンを

筆頭とするハレの医学学派の支持者で、医学におけるいわゆる「医療数学（Iatro-mathematik）」の方向を代表している、とされている。医療数学とは、医学への数学的方法の適用を目指すものである[9]。ヒルシュによると、その時期は、医学の問題をヴォルフ哲学の見方から解決しようと努めた時期でもあるのだが、その後ニコライは、化学の原則も考慮に入れるようになり、その傾向がすでに『熱一般の理論体系試論』（1752）に表れている。そして、より高度な意味での「折衷主義」が、主著と言われる『病理学、疾病についての学問』（1769-79,81-84；正続計９巻）に見られるとされる[10]。

ニコライの論証スタイルは幾何学的、論理学的と形容できるもので、三段論法を基礎として教説を形作っていく筆致は、ヴォルフ哲学のスタイルを踏襲したもののようにも感じられる。そこに時折挿入される「経験もそう教えている」といった言葉が、論理とともに経験にも依拠していることを示す形になっている[11]。

機械論と生気論という対立的な思想潮流に対しては、医療数学の方向性は機械論の身体観と親和的とされることがある。ラウアーは、「母体における子供の発生についての考察」（1746）で「人体を医療数学の意味で機械であるとしている」[12] 箇所を引き、その後も、「ニコライは常に機械論の学派の支持者であり続けた」[13]、と述べている。とりわけ学生時代についてラウアーは、ヴォルフ自身のもとで数学や実験物理学の講義を聴き、クリューガーのもとで幾何学の講義を聴いたことなどを挙げ、もっぱら機械論の学派で教育を受けたのであって、同時に存在した生気論にはおそらくほとんど触れていないのではないかとしている[14]。しかし、それに対してデュルベックは、ライプニッツやヴォルフとコンタクトのあったホフマンの忠実な弟子であり、ニュートン理論やヴォルフ哲学を医学論文に取り入れた一方で、同時に、とりわけ 1740 年代の初期の著作においては、シュタールに倣って精神医学的な考え方にも傾倒していて、一時的ながら、この時代に典型的な生気論と機械論の中間的立場にあった、としている[15]。ガイアー＝コルデッシュは、ホフマンのもとでの教育や周辺にいた医学者からニコライを純粋な機械論者と期待するかも知れないが、実際は転向の好例と言える人物だとして、早くからの心理学への傾倒を指摘している[16]。

同時代の医師で、ニコライと親しい関係にあったフリードリッヒ・ベルナー（1723-1761）の証言は、ニコライという人物を捉え返す時、一定の重みをもっている。ＡＤＢのヒルシュの記述も[17]、ベルナーが書いた医学関係の評伝[18]を唯一参照させている。ラウアーは、ベルナーがあまりに非の打ち所のない人物像を描いていることに懐疑の目を向けていて、ベルナーの評伝は著者の存命中に書かれたものであり、しかもベルナーは若き日のニコライしか知らないという点に注意すべきだと述べている[19]。デュルベックは、ニコライをホフマンの忠実な後継者だとしているベルナーの第２巻（1752）の記述を引きながら、1752 年の時点ですでに忠実な後継者と見ている点、1744 年から 46 年にかけての初期の著作に見られたシュタール理論の一時的な受容には言及していない点に注意を向けていて、それを記述の偏りと見ているようである[20]。

以下では、ニコライの築いた人間関係や、機械論と生気論という図式に最大の重みを置

いてニコライの学問的なスタンスを吟味するのではなく、より一般的に、「啓蒙主義」を諸学を通底する学問的方法論の視座として捉えて、そうしたパースペクティブのなかで、そうした視座を提供していたヴォルフ哲学と、ニコライの模索する医学との関係を検証していくことにする。

2　想像力論の改訂

本稿が取り上げるニコライの想像力論は、1744 年に初版がハレで出版されている。タイトルは「新しい哲学の諸原則から導かれた人間の身体に対する想像力の作用」[21] となっていて、112 頁の分量がある。そのうち 22 頁までが表紙や序文で、本文の残り 90 頁が 25 の節に分けられている。目次、索引は付されていない。

第 2 版は 7 年後の 1751 年にハレの同じ出版社から公刊されている。この時のタイトルが「人間の身体に対する想像力の作用についての考察」[22] である。大幅に加筆されていて、表紙・献辞・短い 2 頁の序文のあと、107 の節に分かれた 224 頁の本文が続いている。やはり目次、索引は付されていない[23]。

実際に初版と第 2 版の構成を比較してみると、第 2 版における加筆の輪郭が窺える。初版では、第 1 節が知覚一般について、第 2 節が想像力一般について論じているのに対して、第 2 版では、第 7 節と第 8 節で知覚について、第 9 節以降で想像力と想像について比較的詳しく論じる前に、最初に第 1 節から第 6 節までの部分で、表象一般、表象の明晰・判明・鮮明についての議論が先行して展開されている。また、想像力に関しても、想像の鮮明さや想像が呼び起こす情念について、紙数をとって語られるようになっている。初版の第 3 節から第 6 節までは夢に関する記述だが、第 2 版では 65 節から 96 節までが夢を論じた部分で、量的に拡大されていると同時に、内容的にも夢魔や夢遊の問題にまで論述の射程を広げている。初版の中心的なテーマだと思われるのが、第 7 節以降で論じられている、空腹、喉の渇き、食欲、吐き気や、呼吸、放尿、欠伸などにおける想像力の作用である。これらのテーマは、第 2 版では、第 37 節以降と第 97 節以降で引き続き論じられているが、全体とのバランスで言えば、中心的なテーマではなくなったという印象を受ける。逆に、初版の 22,23 節や 24,25 節で扱われている妊婦の想像力、誤った空想といった問題は、第 2 版では、第 43 節以降、第 53 節以降でより詳細に論じられるようになっており、読む者の目を惹く。

比較の意味で、初版の 20 頁にわたる序文にも目を向けておきたい。そこからは、ニコライがもっている学問状況の時代認識や、ニコライの機械論に対する立場などが窺える。

哲学の状況については、次のように語られている。

> 「世のすべてのものは、変化に服している。神の如きソクラテス、プラトン、アリストテレスについてどれほど語られたことか。哲学は頂点にまで達して、世の中で完全

かつ賢明な人間になるには、ただ師の言うことを繰り返していればよい、と考えられた。にもかかわらず、デカルトが登場して、すべての栄光が一気に崩れた。ギリシアの哲学者の本を読むのは、彼らの服を着るのと同じくらい愚かなことだと考えられている。そして世の全体が、フランス人のカフスとともに、フランス人の哲学を受け入れている。かつては、記憶に多くの言葉による重しが載せられていた。そして現代では、甘い夢が見られ始めていた。そしてついに、イギリスには比類なきニュートン氏が、ドイツには我らが大学官房長ヴォルフ氏が現れて、こうしたフランス喜劇を終わらせたのである。」(EK1 Vorrede, S.5f.)

記憶、機知、悟性という人間悟性の発達段階に対応付ける形で、アリストテレスやスコラ哲学は記憶に関わり、デカルト哲学は機知と想像力に関わり、そしてヴォルフとニュートンが悟性のために働く、と考えられている。つまり、ヴォルフとニュートンでもって「哲学は成年に達した」(S.7)という見立てである。

「悟性は、空虚な言葉にも、奇妙な空想にも満足しない。つまり、悟性は、アリストテレス的でもなければ、デカルト的でもない。悟性は、判明な概念と厳密な証明を要求するのである。我々の時代において、イギリスのニュートン氏、ドイツのヴォルフ氏が以上にこのことを命じ、実行し、流行させた者がいるだろうか。」(S.7f.)

悟性の発達段階の最後に論理学的な推論の能力がある。この言葉は、医師ニコライによる論理学的、数学的方法論への信頼表明である。

ニコライによれば、医学と哲学は不可分の関係にあり、娘が母に従うように、哲学が姿を変えれば医学も変わる。もっとも、ニュートンやヴォルフの哲学は、医学においては「まだ完全には習慣となっていない」(S.11)。ニコライは、少数の者が哲学や数学を紹介し始めているところだと言い、特に「クリューガー教授」の『自然学』の書を挙げて、自らは「その足跡を追うことにした」(ibid.)と述べている。

医学の状況については、ある問題から「分断」(S.12)の状況にある、と言われる。それが機械論と生気論の問題である。

「たとえ人間の身体が機械であるとしても、それはまったく違う種類の機械である。つまり、自然は常に人工のものには無限に勝っているのであって、人間の身体は自然の機械、それに対して時計は単なる人工の機械である。後者では、すべてが構造から、重力や電気の法則から理解される。しかし前者には、全く異なる性質がある。」(S.12f.)

ニコライはこのように述べながらも、同時に、人間の意志というものを排除しないが、さりとて精神（Seele）という言葉で片づけて、身体の構造も運動の法則も考えないということにはならない、と言う。

「というのも、双方をよく考え合わせると、私には常に、身体について機械論的に哲学しようとする者たちの意見を取り入れる方が、身体のすべての変化を、知ることもできなければ、その活動様式を把握することもできない一つの原因に帰そうとするよりも、より確かなことのように思えるのである。」(S.14)

しかし、「精神よりも身体のことを気にかける医学」(S.15f.)の方がより確実なので、大抵はそうした医学に従ったきた、と表明するニコライのこの論考における企図は、「新しい哲学の根拠」(S.16)から問題を解明することである。

「最良の機械論の医師なら、身体の大部分の運動は、たとえそれが我々の意志に従っていないものであっても、精神に由来する、と言えるものである。しかし、その運動をそれで理解したと考える必要はない。その運動の起源は心理学の規則に反しておらず、むしろそれによって規定されている、ということを示すにとどまっている。これでは不十分で、身体の構造や運動の法則から、こうした運動が身体の構造に合致していることや、こうした運動がまさにこのような形で起こったのはなぜかを示さなければならないのである。というのも、数学者たちが古来から思考において常に守ってきた法則こそが、医学が注意を払わなければならない法則だからである。数学者たちが要求しているのは、判明な概念と徹底した証明に他ならない。」(S.16f.)

医学の進む方向を模索するなかで視野に入ってくるのは、哲学の一部門である心理学の規則で、それが身体の運動法則と合わせて論じられなければならない。さらには、方法論としての数学の法則がその同じ視野に入っている[24]。

こうしたニコライの議論は、例えばデュルベックのように、後の時代の研究者が機械論と生気論という対立図式を掲げて、どちらに傾いているとか、両者を折衷しているといった評価を下そうとするのとは、微妙に異なった次元で思考が展開されていることを示唆している。ニコライにも、医学者の立場が機械論と生気論とに分裂しているという認識は、思考の構図として存在する。しかし、ニコライはそれに対する自分の位置を先に定めて個々の判断を下しているわけではない。こうした文章の筆致を見れば分かるように、ニコライの判断を動かしているのは、確実性を求める学問的な姿勢であり、「機械」や「精神」という概念を最終的なものとはせず、手続きに従って法則性を探求する姿勢である。

3　想像力の心理学

第2版の本論は、想像力論の哲学的な枠組みを定める議論から始まっている。当時の用語法で言えば「心理学」的な枠組みと言うこともできる。「心理学」とは、精神論というほどの意味で、悟性を構成する諸能力についての議論が中心に据えられていた。

まず最初に、鏡や絵画との比較から対象の「表象」ということが説明され、表象対象が他のものと区別されれば表象は「明晰（klar)」であること、表象対象の徴表が明晰であれば表象は「判明（deutlich)」であることが述べられる（EK2 §1-3, S.1f.)。この明晰判明知の規則から、表象の「鮮明さ（Lebhaftigkeit)」を語ることができる。鮮明さは明晰性の度合いによって規定されるとされているからで、鮮明な表象は弱い表象を抑えてしまうと言われる（§4, S.8f.)。また、注意を向けることで表象をより明晰にする能力が「注意力

(Aufmercksamkeit)」であり、逆に「抽象（Abstraction)」という能力は表象の鮮明さを弱める、ということも付言される（§5, S.9f.)。

鏡や絵画との比較という出発点からしてそうであるが、ここでの議論の中心には視覚がある。「明晰でない－明晰である」ということを表すドイツ語は dunkel-klar 、「判明でない－判明である」ということを表すドイツ語は verworren-deutlich で、視界を照らす光の量によって、対象が見えるかどうか、あるいは、対象がはっきり見えるかどうかが問題とされている。

「明晰でない表象は、目の前のすべてが黒色で、まったく何も見えない真っ暗な夜のようである。まったく光をもたず、我々はそれをまったく意識しない。」（§2, S4f.)

「明晰かつ判明な表象は、言い方を変えれば、強い光で照らされて、全体を他から区別できるだけでなく、その中に含まれている多様なものを認識して互いに区別できるということである。」（§3, S6)

光の比喩で語られる明晰判明知の観念は、周知のように、ヴォルフ哲学のものである。『ドイツ語形而上学』では、次のように言われている。

「この名称は視界から取られている。見るものが十分区別できるとき澄んだ（klar）視界と言い、逆にきちんと区別できないとき暗い（dunkel）視界と言うからである。」[25]

ヴォルフは「心の光（das Licht der Seele)」[26] という言い方もしている。

ニコライは論の冒頭で、感嘆するべきは、鏡は像を意識しないが、心は対象に関していだく絵を意識する点である、と述べている。表象のなかでも意識された表象が「思考」と呼ばれ、物事が意識されるのはそれが他と区別されるからである、という具合に最初の論理が展開していく（§1, S.1f.)。実はヴォルフにとって、この「意識する」ということが「心（Seele)」を規定するものであった。ヴォルフは、『ドイツ語形而上学』で「心一般について」の章を書き起こすに当たり、心について、「自らや自らの外にある他の事物を意識しているもの」と定義付けていた[27]。

注意力という能力は、『ドイツ語形而上学』では、知覚・想像・記憶について述べられたあとで、他の心の能力に付随して見られる能力として示されるので[28]、そういう意味では、ニコライの論では突出している観があるが、「注意力は鮮明さの起源」（§5[表題], S.9）と言われるように、表象の鮮明さという論点がニコライの関心の中心に置かれているのである。その前の節の鮮明さの議論も、経験心理学から意図的に抽出されて早くに言及されている、と見ることができる。それは、このあとの議論の展開で、想像力の身体への作用を問題にする際に、情念（Affect）と鮮明さの関係が重要な要素になるからである。この点は、４歳年上で同じハレ大学のゲオルク・フリードリッヒ・マイアー（1718-1777）[29] が、情念（Leidenschaft）の昂進を論じた『情動一般についての理論的教説』（1744）[30] の第４章において、一貫して表象を鮮明にする手段を考察しているのと、同一の思考基盤に立っていると見てよいだろう。マイアーの『あらゆる美的学問の基本原理』（1754,55,59）[31] では、第１部第２章で悟性の諸能力が論じられているが、ヴォルフと違って、感性的認識能力一

般、注意力、抽象能力、感性、想像力、機知の能力、鋭敏性、記憶、創作力・・の順で計十四の能力が扱われている[32]。

この時代の悟性の諸能力についての議論では、想像力は知覚や記憶といった能力との関係から規定されるのが一般的である。ニコライによれば、知覚とは現在するものの意識された表象である（EK2 §7, S.12）。それに対して想像力は、「過去の知覚を再び呼び覚ます能力」である（§9, S.16）。

「昨日喜劇のなかにいて、今日見聞きしたことを再び表象するなら、この私の今日の表象は想像である。」（ibid.）

我々の観念からすると、このように定義される「想像力（Einbildungskraft）」は記憶に近いもののように感じられる。日本語では像を想うと言い、ドイツ語では心のなかに取り入れて（ein-）形成する（bilden）と言うが、古くから想像力の位置付けは、記憶に近い再生能力と記憶から遠い空想能力との間で揺れてきた。因みにヴォルフは、そこにない事物を表象する能力が想像力であり、我々がかつて有していた思考が再び現れた場合に、かつて有していたと認識する能力が記憶であるとした[33]。マイアーは、「我々の表象を保持し、持続させる能力」が想像力だとしている[34]。やはり、想像力を再生的能力とする系譜上にあると言えるだろう。

しかし、ニコライは創作力（Dichtungskraft）についても別に論じている。

「かつて知覚した、あるいは、感性によって表象された不在の事物の表象が想像である。それに対して、かつて知覚されたことのない不在の事物の表象が創作（Erdichtung）である。」（EK2 §13, S.23）

思想史的な観点から言えば、想像力の定義と位置付け次第でそこからはみ出て別の名称が与えられるこうした創作能力も問題圏に含め入れて、広義の想像力として考察する必要がある。ニコライ自身も、想像力はかつて表象したものの一部だけを特に表象することができ、別の表象と複合することもできることから、創作力は想像力と区別できる能力ではなく、想像力そのものである、と結論付けている（§13, S.23f.）。

「創作力とは、想像を分割し、様々な想像の部分や破片から新たな表象を合成したり、創造したりする能力である、と言うこともできる。」（§13, S.24）

ヴォルフは、こうした能力を最初から想像力に含め入れて考察している[35]。マイアーは、「かつて知覚したものを再び新たに表象する能力」[36] のみを想像力と言い、創作力については、想像力、記憶、抽象、機知の４つが「複合された認識能力」[37] であるとしている。

ここでの説明にも生かされているが、ニコライが想像力の原理としているものは、連想や観念連合と呼ばれるものである。

「我々がかつて二つの事物を同時に表象した場合、そのうちの一つを再び表象すると、我々のなかにもう一つの表象も喚起される。」（EK2 §10, S.17）

「我々が何かを表象したとき、いま表象したものと類似性があるかつて表象した事物の表象が非常にしばしば喚起される」（§10, S.18）

ニコライは、こうした原理[38]から、過去の知覚の一部分であった表象を得るや否や、想像力がその知覚の全体を我々の心にもたらすことも明らかだとしている（§10, S.19）。同時性、類似性、包含関係が連想を進める点が注目される。

思想史では、ヒュームが『人間本性論』において、このような観念の結合を想像力の原理としたことがよく知られている。ヒュームによれば、過去の印象が観念として再び心に現れる場合に、最初の活気をかなり保持しているものが記憶で、そうでないものが想像である。記憶は変形する力をもたないが、想像はすべての単純観念を分離して、好きなように結合することができる。このように想像の機能は自由度が高いが、こうした連合を生じさせて心をある観念から別の観念へと移らせるものが三つあって、それが類似性、時間的または空間的近接性、因果性である[39]。ヒュームの哲学は観念間の結合に必然性を認めず、従って因果関係にも必然性を認めず、それを心の自然な働きに帰すために懐疑論に傾くこととなる。

哲学史の図式では合理論として経験論に対置されるヴォルフの場合、知覚したことのないものを想像する仕方は二つで、思いのままに分解し思いのままに組み合わせる方法と、充足理由律に従って連関を産み出す方法とがある。ヴォルフは前者を空虚な空想に到る可謬的なものと考え、後者を重視している。前者に関して、過去の知覚と何かを共有していたり、過去の知覚と類似している場合に、求めているものと違うものが心に現れることがあって、想像は完全には制御できないと言われる[40]。

想像の可謬性という点に関してニコライは、想像は過去に知覚した通りか否かで、正しい場合と正しくない場合とがあるとした上で（EK2 §14, S.24f.）、想像力が活動する際に創作力がともに働いているのが通常だが、それがなかなか気付かれないので、合成された表象を正確な想像と見なしたり、切り詰められた想像を全体的な想像と見なすことが容易に起こる、と考えている（§15, S.25f.）。こうしてみると、心の自然な働きによって観念が連合されていく事象を観察し、そこに何らかの可謬性を見て取る思考は、ヒュームやヴォルフとも共通していると言えそうである。

4　表象の強度と運動の強度

知覚と想像力の違いは、表象の対象が現前しているか過去のものになっているかということで、それが表象の強さの違いとなって表れる。知覚は最も強くて鮮明な表象で、想像はそれよりも弱い。医師ニコライは、逆にこうした表象の強さの違いがあるので、正常な状態の人間なら両者が区別できる、と述べる（§12, S.20f.）。さらにニコライは、それぞれの表象が脳への神経液（Nervensaft）の運動を伴うと想定しているため、その運動の強さが表象の強さと連動すると考えている（§12, S.22）。こうした記述は表象心理学の枠を超えていて、医学的言説に接続するものと見ることができる。

第２版でこうした「神経液」についての記述が最初に見られるのは、知覚について説明したあとの箇所である。

「神経が知覚の道具であり、神経なしに知覚は生じないということは、経験が十分に指し示してくれている事柄である。従って、知覚が生じるためには、神経に変化が生じなければならない。神経は物体であり、物体における変化は運動である。ゆえに、知覚が生じるためには、神経が運動させられなければならない。神経を運動させる物体がなければ、神経が運動させられることはありえない。それゆえ、知覚が生じるためには、神経に働きかけ神経を運動させる物体が存在しなければならない。ところで、この物体は、我々の身体の外にあるか内にあるかどちらかである。例えば後者は、病気の場合に認めることができる。頭部へのあまりに激しい血液の駆動が、耳鳴りや頭痛や他の知覚を生じさせることがある。しかしこれらすべてを合わせても知覚を生じさせるのには十分ではなく、より以上のものが必要である。つまり、神経液が運動させられること、神経液の運動が脳に到るまで続くこと、こうして喚起された表象を心が意識する必要があること、である。」（EK2 §8, S.13f.）

物体の変化は運動であるという観念のもとで三段論法を重ねつつ、神経液の運動という条件が導入されている。つまりは神経が「自然で健康な状態」（§8, S.14）にあることが必要だとニコライは言う。ただ、その命題の論証は、詳細にわたることになり、哲学と医学の書物によってすでに十分なされているということで、略されている。神経の種類によって惹起される感覚の強さが変わるということが付言されている（§8, S.14f.）。

実は、想像力論の初版では、本論の冒頭からこうした身体側の変化という議論がなされていた。

「我々は、我々の外にある事物を表象する。しかしそれは、その事物が我々の身体に変化を引き起こす限りにおいてである。このとき心が寄与していることはよく分かっているが、心だけでは十分ではないことも承知している。」（EK1 §1, S.23）

ニコライは感覚器官等に言及したあと、知覚の場合、我々に変化をもたらす物体が現前していると述べ、さらに、身体における運動についてこう述べている。

「どんな知覚でも、神経の表面（Nervenhäute）で、生気（Lebensgeist）へと伝達される運動が起こるということは、まったく証明を必要としない。しかしまた、人間の身体におけるほとんどすべての運動が感覚に由来しているということも、まったく当たり前のことである。」（EK1 §1, S.24）

しかし、知覚が創出された場所では常にそれに見合った運動が生じるという命題に関して、それを真実だとは思わなくなったということが示唆され、この問題を医学に導入した功績はクリューガー教授に帰せられるべきと述べられる。こういう風にして初版の議論は起こされる。続く第２節でも、想像が鮮明度において知覚にほとんど劣らない場合がある、という経験が語られ、そうした場合には、それに見合った運動が起こると主張される（EK1 §2, S.26f.）。こうして見ると、初版の方が、運動の強度や表象の鮮明度が変化しうるという

想像力論の基本的な問題意識を感じ取りやすい語り出しとなっていたことが分かる。逆に、初版の心理学的な基盤は単純なもので、第2版への改訂が哲学の吸収過程を反映したものであることがよく窺える。

第2版で表象の鮮明さが中心的に議論されるのは、心理学的な概説が終わったあとの第16節以降である。基本的には、過去の知覚の反復である想像の鮮明さは、知覚の鮮明さに由来し、元の知覚が鮮明なほど想像も鮮明であると言える（EK2 §16, S.27）。また、再想起までの時間的間隔や反復回数など、表象の頻度が鮮明さにつながるとされる（§18, S.30f.）。さらには、先述の注意力の使用を通じて想像はより鮮明になる。一般には、強い表象が他の弱い表象を抑えてしまうので、知覚は想像を弱めて抑えるわけだが、注意を知覚から逸らして想像だけに向けると想像の鮮明さが高まる。夢を見ているときもこれと同じ原理で、注意力の働きによるわけではないが、感覚器官が閉ざされていて想像を弱めて抑えるような感覚が存在しないので、夢を見ているときは、現前しているものに関わっている気分で、想像を知覚そのものと見なしている（§17, S.29）。ニコライが宗教的な熱狂者を同じように説明している点は、当時の時代背景を考えると興味深い。激しい動きで身体が疲労して、感覚器官を閉ざすか弱めるかする結果となって、そのせいで想像が妨げられることなく作用し、その想像が非常に鮮明なため、現実の知覚と錯覚されるのだとニコライは言う（§17, S.29f.）。

さらに「情念（Affect）」という概念が導入されて、ニコライの立論の道具立てが次第に整っていく。情念は想像を鮮明にするものである（§19, S.32）。基本的に、想像力は過去の知覚を再現するので、その時の情念も再現する。ここにも反復の傾向性というものがあり、人によって不機嫌なことばかり想像したり、物事のよい面ばかりを想像したりするように、想像力には特定の知覚を再びもたらすことに慣らされる性質がある（§21, S.34f.）。そうすると、反復される情念にも傾向性が生じる。さらには、かつて知覚した時以上の情念を喚起したり、以前にはなかった情念を喚起したりすることも可能である。最初の知覚の際は注意を向けていなかったものに、あとで想像するときに注意を向けることがありうるし（§24, S.41）、想像力には観念連合の原理があって、無数の表象を喚起して織りまぜることが起こりうるし（§23-24, S.40f.）、そしてまた、上述の創作力が強い情念を喚起することもありうるからである（§23, S.40）[41]。つまり、情念が想像を鮮明にするのとは逆に、想像の鮮明さが情念を強くする。ニコライは、夢が引き起こす情念や、怒り狂った人の情念についても同じように考えている（§24, S.41f.）。

想像の強度はこうして情念の強度と結び付くが、それがまた物理的な運動の強度とも比例関係にある。

> 「脳の血管を通る血液の素早く激しい運動もまた、想像の鮮明さの一因である。脳における神経液の運動は、脳の血管を通る血液の運動に従っている。・・脳における神経液の運動が非常に素早くかつ激しく起これば、想像もまた非常に鮮明なものとなるに違いない。・・高熱のとき想像は非常に鮮明で、病人がそれを知覚と取り違えるほどで

ある。・・胆汁質の人は粘液質の人よりも想像がはるかに鮮明である。つまり、頭部の血液循環が、前者の場合、後者よりもはるかに速く激しいということである。」（§20, S.33f.）

情念を媒介として表象の強度と運動の強度を結びつけるこうした議論が、ニコライの想像力論の基本的な構えと言えるだろう。

「想像は情念を喚起しうる。情念は人間の身体に変化を引き起こす。ゆえに、想像力もまた人間の身体に変化を引き起こしうる。」（EK2 §27, S.49）

5 心身の予定調和

想像が情念を喚起し、情念が身体的変化を引き起こす、という立論の基盤として、ニコライは、心身の「調和（Harmonie）」という観念を想定している。

「身体と精神は厳密に調和している。こういう風に言ってもいいが、身体の病気は精神の病気をもらたし、後者がまた身体の病気を常にもたらす。」（EK2 §26, S.49）

ヴォルフの『ドイツ語形而上学』では、経験心理学からさらに精神の本質を探究する第5章において、この心身の調和という問題が扱われていた。ヴォルフはそれを一般に信じられていることだと述べていた。

「一般に、身体の力を通じて心に思考がもたらされ、心の力を通じて身体に動きがもたらされる、という考えが信じられている。つまり、我々の感覚器官を動かす物体によって、神経やその中にある液体の運動が引き起こされ、この微細物質がその運動を通じて心の中に思考をもたらす場合に、それを我々は知覚と呼ぶのであり、また、それによって我々は、我々の外にある、感覚器官における変化を引き起こした物体を表象するのである。これとは逆にまた、心はその力を通じて、つまり、その意志を通じて、ある種の運動を身体の四肢にもたらし、それによって身体は、心が望むことを行うのである。」[42]

しかしヴォルフは、心身の間に自然法則に適う影響関係があることは認めなかった[43]。ヴォルフは、心が身体に自然に作用して世界に新しい力が増えることも、逆に身体が心に作用してその分世界の力が減ることも考えられないとして、世界における一定の動力の維持という観点から、心身の作用は自然法則を超越した反自然的なものだと規定する[44]。しかし同時に、デカルトのようにその原因を神の意志に求めることも、運動法則に反するとして否定し、ライプニッツの「予定調和」という観念による説明に行き着くことになる[45]。予定調和が可能なのは、世界における変化が不動の秩序の中で継起的に起こり、心における知覚も同様に不動の秩序の中で継起するので、両者が最初に調和状態におかれていれば、その後はそれが恒常的に続くから、とされた[46]。

ニコライの論考は、「人間の身体に対する想像力の作用についての考察」という表題をも

つので、「調和」という観念とともに、この「作用（Würckungen)」という言葉の意味が問われることになる。ニコライは様々な箇所で心身の調和と相互作用に言及している。例えば、種々の情念に対して、その作用として血液の運動の様子とそれに付随する身体事象を述べる箇所では、次のように述べている。

「同時に身体に変化が起こることなしに、心に情念が生じることはない。しかも、どんな情念に対しても、この情念に特有の変化が身体に発生する。誰に対しても経験がこの点を証明してくれている。身体と心の厳密な一致のおかげで、これ以外のことにはなり得ないのである。・・哀しみの場合、血液と神経液は一層ゆっくりと運動し、不安や胸の息苦しさや涙が生じる。それに付随してまた様々な変化が起こり、特に胃や腸といった固体状の部分が衰弱する。そして血液が濃くなる。」（EK2 §25, S.42f.）

また、「人体の美しさについて」（1746）という別の論考では、次のように記されている。

「表情の多様性、快い表情や不快な表情は、私の考えによれば、子供の頃の第一印象に由来する。・・心のなかの変化が様々であるのに応じて、顔つきの変化は様々であること、心のなかの変化は、同時に脳内の神経液の運動がそれに結び付かずには起こらないことを、私は哲学者たちから教えられた。このような関係にあるならば、心に快い知覚や不快な知覚が生じると、脳内にそうした変化が起こるに違いない。そしてそれが快い表象や不快な表象を表現するのである。要するに、表情というのは、知覚に従って形成されるのであり、知覚が長く持続する場合には、しっかり定着して、その徴表が消えない。」[47]

心身の相関についてこのような表現にとどめ、心の中の変化がどういう風にして血液や神経液の変化を引き起こすのかという点までは踏み込まない姿勢は、ヴォルフ哲学の予定調和という考え方の枠内に留まっていると見ることもできるだろう。しかし、「涙と泣きについての考察」（1748）には、次のような文章も見られる。

「私はこれを、経験が教えてくれることとして受け入れている。心身の間のこうした一致の原因が何か、それがもたらされるのは身体の影響によるのか、観念の影響によるのか、それとも機会原因によるのか、予定調和によるのか、ということについては、まったく気にしていない。これらすべては、私にとってここでは同じようなものと言っていい。そもそも本題には関係ないからで、この説明方式のなかから好きな一つを受け入れればよい。この場合真理は、誰もが区別なく到達できるよりもはるかに高いところに住まうもののように、私には思われる。」[48]

態度決定を避けているというよりは、それは哲学の問題であるとして一線を引いていると見るのが適当であろうか。本稿では、これまでに見たヴォルフ哲学への親和性を考慮に入れた上で、この点でも、ニコライの立論はヴォルフ哲学に矛盾なく接合しうることを確認しておくこととしたい[49]。

いずれにしても、理由付けはともかく、心身の間の調和が想定されているのは確かである。そして、デカルトが述べたように、物体は運動するもので、精神は思惟するものだと

したら、身体のなかで運動するものはとりわけその液体部分であるから、血液や神経液といった体液の運動が焦点化されるのは、ことの必然であったように思われる。ニコライの想像力論は、そうした意味で、体液の運動の変化と表象の変化の間に並行関係を想定する立論となっている。

6　想像力を視野に入れた治療

想像が情念を喚起したり強化したりする、その情念が身体的変化を引き起こす、こうしたことを医師であるニコライが問題にするのは、上位と下位の認識能力の意味付けが変化して、情動に焦点が当たる認識論的布置があったからではなく、そこに病因論としての側面があったからである。

「人間の身体に引き起こされるすべての変化には、二種類の性質しかない。つまり、健康の維持と再生に役立つか、病気をもたらすか、どちらかである。ところで、情念は人間の身体に変化を引き起こす。従って、その変化は、健康の維持と再生に役立つか、病気をもたらすかのどちらかであるに違いない。」（EK2　§26, S.45）

この三段論法が示唆するように、情念は「病気の遠因」（§26, S.46）に数え入れられる。そして、それ故に、情念は治療のための対象や手段となる。

「理性的な医師なら、感情の動きが病気の治療にどれほど大きな影響があるか、十二分に承知している。それだけでなく、多くの最も重く最も長引く病気が情念から生じるということである。こうした病気は、この病気を発生させ維持している情念を抑圧したり弱めたりすることによってしか、根本から治療することはできない。しかし、相反する情念やまったく異なる種類の情念を心に喚起しようとするのでないとしたら、心を支配している情念を抑圧したり弱めたりすることは、どうして可能になるだろうか。実際、それでは無理である。哀しみのためにメランコリーになった人に、最良の薬を飲ませても、情念を阻害しなければ、すべては無駄になるだろう。しかし、その人を心地よい集まりに連れて行き、様々に楽しませれば、要するに、その人に反対の情念、つまり喜びを喚起するよう努めれば、あなた方ははるかに成功を収めるであろう。そして他の症例でもまさにそうなのである。病気が情動に起因するものではなく、他の物質的な要因から生じたものであっても、情念をうまく理性的に喚起することで、治療は並はずれて軽減され促進されるのである。」（§26, S.46f.）

患者の精神面に目を向けて、固着した情念の解放を問題にした点では、その手法や理論装置は大いに異なるが、後の時代の精神分析と比較しうる側面があると言える。

ニコライは、メランコリーについて、想像力の身体への作用という自らの図式に則って説明を展開している。想像力が哀しみの対象を常に心に与える（§35, S.71）。想像の頻度は表象の鮮明さを高める。また、想像力は好ましくない出来事に無数の他のよく似た表象

を結合し、それによって不快な表象が強度と鮮明さを得る（ibid.）。その結果、常に悲哀という情動に耽ることになる（ibid.）。そういう人は最終的には鬱になることが、日常の経験で分かっている（§35, S.70f.）。想像力によって哀しい表象で満たされた人は、その素因性が高い。しかしニコライは、情動に起因しないメランコリーについても記述している。生活様式上の様々な欠点から、血液が濃くなり、頭部の血管が弱くなった場合、血液が運動しづらくなって、然るべき力で血液を押し流すことができなくなる。そうすると、人はメランコリーになる（§26, S.47f.）。こうしたメランコリーは、有効な薬とよい生活様式から治すことができるのだが、患者の心を占めているものと対照的な情念を喚起して、患者の感情を正常なものにすることで、治療をより容易により順調に進められるようになる。それは、患者の心を占めている悲哀が、すでにそれ自体でメランコリーを引き起こす力をもち、それによってメランコリーを拡大し維持しているからである（§26, S.48）。

想像そのものが治療の対象や手段となることもある。想像を現実の知覚と取り違える空想家や狂人の治療例として、ニコライは、ハラーが編集したライデン大学教授ブールハーフェ（1668-1738）の講義録から４つの事例を引いている[50]。例えば、他の面では完全に理性的でありながら、自らの両足が藁であると固く信じ、折れてしまわないよう場所を動こうとしない男性に対して、友人たちは、説明や証明がまったく功を奏さなかったため、その男性に長靴を履かせて馬車に乗せ、泥棒に見立てた学生に襲わせて、逃げ出さざるを得ない状況を案出した（§54, S.110f.）。あるいは、放尿によって洪水が起こると信じていたパリの学ある法律家に対して、医師が街が大火だと偽って、放尿を忌避してきた患者を死から救った（§55, S.112f.）。こうした事例に対して、初版では、陽の光を見ていると称する者にその逆を数学的に論証したところでおかしな結果にしかならないように、誤った想像から解放するには、論証によるのでなく、そうした想像よりも鮮明な感覚を喚起するのが最良の方法である、と述べられていた（EK1 §24, S.103f.）。第２版でも２つの方法があるとされ、鮮明な感覚の喚起によって想像を正常にするのが第１の方法と言われている（EK2 §57, S.117f.）。

また、第２版では、シャリテーの医師で、死後にニコライがテクストの編集に関わることになるザムエル・シュールシュミット（1709-1747）の報告からも例が採られている。スウェーデンの外科医が、頭部の寄生虫がもたらす痛みに悩まされているという女性の空想に乗りながら、手術をして腐敗した骨片を取り出し、隠れた虫を捕らえると言って追加の開頭で経過を観察し、腐敗の進行がないことを確認したあと、別に入手した変わった虫を血で彩色して女性に渡す（EK2 §56, S.114f.）。こうした空想を利用する方法をニコライは正常化の第２の方法と言っているが（§57, S.118）、想像力論を通底する心身相関の構図からはやや逸れた議論と見てよいだろう。デュルベックは、患者のフィクションの枠内で治療手段を選択することから、これを「審美的治療」と言い、ニコライはマイアーの情動論と美学に基づいているとしているが[51]、強引な評価という印象は免れない。

私見によれば、問題の根底にあるのはむしろ、表象の連合や断絶ということであると思

われる。想像力には、先に述べたように、表象を連合する連想機能があり、哀しみという特定の情念に通じる表象を集める性質がある。また、ヴォルフ心理学の明晰判明知のテーゼで、強度の強い表象は相対的により弱い表象を掻き消してしまうので、一定の強度をもった想像は知覚を遮ることにもなる。自らを相対化する観念が存在しない表象群は固定観念となる。「情念に捕らわれると我々は状況をほとんど考えなくなり、想像がきわめて鮮明になる」(EK2 §58, S.121.)、「情念が非常に強く持続的であれば、それによって悟性の使用が抑圧され、・・ついにはメランコリーに陥る」(§58, S.122) とも言われる。従って、メランコリーに対して、表象群の核となる情念を取り除くことは、好ましくない表象の連合を阻むことと言える。また、空想を解決する2つの方法のうち、第1の方法は、現実の感覚と接続させることで、孤立していたがゆえに存在可能であった空想を破壊するものであり、第2の方法は、現実と空想の切断はそのままに、現実と空想のそれぞれの世界で骨片の除去と「寄生虫の除去」という解決を図るが、結果として痛みという現実的基盤を失った空想は意味をもたなくなるというものである[52]。デュルベックは、空想に対処した事例の紹介について、個別に実際的な解決を探すという点で、医学が経験志向であることを証言するものと評価しているが[53]、治療の類型性・個別性という観点と治療が経験志向であるということとは必ずしも一致しないし、経験志向か否かという判断の基準も曖昧で、精神史的な図式化が過剰であると感じる。体系化された哲学と経験的な医学を図式として対置しつつそうした評価を下すことは、誤まった解釈を導くものとも言える。

空想についての議論の延長上でニコライは、病気ではないのに、あるいは、実際以上に病気であると思い込む人々の治療についても言及している。ニコライの分析によれば、そういう人々は、些細な異常から過去の類似の知覚について想像を膨らませ、注意力やその他の下位の認識能力が共同して病気かも知れないという観念を増幅し、そうした表象群が現実の知覚と同等の鮮明さを得るに到っている。ヒポコンデリーやメランコリーの人に特有で、一般に強い想像力を有する人にも認められる、という。こうした患者には、「理性的な表象によって異なる考えに導く」試み、「心理学的に治療する技術」が必要である、と述べられる (EK2 §64, S.132f.)。そうした心理学的治療の対象は、端的に言えば、想像力によって育まれた好ましくない表象の連合であり、そうした想像力の機能を理解することが医師に求められていると言ってよい。

7 想像力が関与する身体事象

ニコライは、妊婦が胎児に与える影響という医学的な問題や、摂取や呼吸や運動といった日常的な身体活動についても、想像力の作用を研究している。

前者はよく知られた問題で、ニコライもそれについて1746年に論文を書いている[54]。

「妊婦の想像力が奇形 (Misgeburth) や母斑 (Muttermal) をつくり出せるか、これ

は、その解答が医学におけるあまたの論争や不一致に機会を与えることになった、そういう問いである。」(EK2 §43, S.87)

経験から言って妊婦の想像力が非常にしばしば母斑や奇形の原因になる、と主張する人がいる一方で、その逆を主張する人もいる、という時代状況が語られ、後者の代表としてブロンデルやモーペルテュイの論が紹介される(EK2 §43, S.87f.)。18世紀には、この問題に関して二度の山場があったと言われる。一度目は、18世紀前半のイギリスにおいてターナーとブロンデルの間で論争で行われた時で、二度目は、1756年にサンクト・ペテルブルグのアカデミーがこの問題を懸賞課題とした時であるが、後者はニコライの想像力論以後のことである[55]。

ニコライは、非常に多くの伝承・報告が誤りで根拠のないものとしながらも、すべての伝承・報告を一括して否定することもできないとして、一部を正しいものと認め、経験ではなく論理で証明しようとする(§43-44, S.90f.)。そこに感じ取れるのは、古くからのいわゆる体液説にも通じるような、しかし運動という切り口を前面に出した、体液重視の姿勢である。妊娠中は母親と胎児には同じ血液が循環していることがニコライにとっては決め手になっている。ニコライによれば、母親の想像力が情念を喚起すると、情念と結び付いた想像は鮮明ということもあって[56]、それによって血液や神経液に異常な運動が起こる。母体内の子供の器官部分は非常に軟らかく繊細なので、それが子供に異常で反自然的な変化を引き起こす(§44, S.91f.)。

「それらは適切な位置や場所から動かされたり、歪められたり、切り離されたり、引き裂かれたりするかも知れない。その自然な姿、大きさ、比率、形状が変えられ、なくされてしまうかも知れない。そして、母親から子供へと流れる血液の異常な運動が同時に強いものであれば、こうしたことのすべてがそれだけ一層容易に起こりやすくなる。」(§44, S.93)

母斑についても、奇形と同様に、他の要因も否定しないとしながら、血液の異常な運動ということから説明される(§50, S.103)。さらにニコライは、母親の血液や神経液に特定の情念に特有の運動が繰り返されることで、子供の身体にもそうした運動をつくり出す能力が備わり、子供にも母親の心に生じたのと同じ情念が生じる、そうして母親の好き嫌いが伝わる、とまで言うようになる(§51-52, S.103f.)。こうした一連の説明に感じられるのは、心身の照応に対する頑なな信頼であり、そうした図式の過度の敷衍である。

また、日常的な身体知覚・身体機構においても、想像力の関与が観察される。こうした主題では、母胎の主題で見られた情念と体液運動の比例関係とはまた違った形の心身の媒介が語られる。

例えば、空腹感というのは胃における不快な知覚で、食べたいという欲求とは異なるものだという。前者を後者につなげるのが想像力の作用で、不快な知覚を解消しようとする時に、想像力の連想機能が働いて、そうした不快な知覚を解消した過去の経験が呼び覚まされ、それが食べたいという欲求をもたらす(EK2 §97, S.202f.)。本当に空腹でなくても、

好みの料理を見たり、特定の時間になると、想像力が過去の経験を喚起して、食欲が湧くことになる（§98, S.206f.）。口や喉の乾きという不快な知覚に対しては飲みたいという欲求、直腸や膀胱の不快感に対しては排泄の欲求、様々な身体的な疲労という不快感に対しては欠伸の欲求といった具合で、それらを想像力が媒介する（§99-103, S.207f.）。呼吸、発言、歌唱、運動といった身体行為もまた、試行によって筋肉等の運動を覚えていき、それを想起してなされるものと言われる。その過去の経験の想起に想像力が関わっている（§102,106-107, S.209f.）。要するに、「身体が覚える」ということを、想像力の作用に媒介されたものとして説明している、と考えればいいだろう。

多くの場合、想像力は「明晰ではない仕方で」（§103, S.216）、つまり、無意識のうちに作用する。想像力には、過去の経験を組織化して、無意識の身体的習慣を形成する力があると言ってもいい。一般化して言えば、ニコライの見立てでは、後天的に獲得された身体運動は、想像力の作用に支えられたものなのである。我々の身体活動は過去に形成された観念連合が無意識のうちに支えている。

8　夢、夢魔、夢遊

最後に、当時の医学の在り方が垣間見える夢と夢魔と夢遊についての理論を取り上げておきたい。夢についてのニコライの記述は、ヴォルフ哲学的な枠組みを強く感じさせるものである。夢魔や夢遊の問題は、夢理論の延長上にある医学的問題である。

ニコライによれば、覚醒時には、我々は明晰な感覚を有しているが、睡眠時には、外的な感覚知覚が停止して、明晰な表象はもたない。覚醒時には、神経は神経液で十分に満たされているが、睡眠時はそうではない。しかし、夢は眠りのなかで意識される表象で、ニコライは意識される表象は明晰な表象だとしているので、夢を見ている人は完全な眠りのなかにはいない、ということになる。感覚と明晰な表象は、目が覚めてしまうほど強くもなく、深い眠りに入って夢が見れないほど弱くもない。そういった表象心理学的な意味で、夢は眠りと覚醒の中間状態であるとされる（EK2 §65-66, S.136f.）。

そうした夢と想像力との関係についても、想像力論の冒頭に置かれた心理学の線に沿った説明がなされる。夢もまた、想像力の作用がもたらすものである。意識される表象、すなわち「思考」は、心理学の分類では、対象が現在か過去か未来かによって、知覚か想像か予見ということになる。夢を見ている人には非常に弱い知覚があるが、夢自体は知覚ではない。そのことからニコライは論理的に、夢は想像か予見かである、という命題を導く（§67-68, S.142f.）。だたしそこで言われる予見というのは、いわゆる予知夢とは異なるものである。知覚や想像の諸部分をまとめてこれまでに経験したことのない一つの表象にすることが「予見」であり、一種の推論と考えられている。必ずしも的中する必要はなく、未知の表象という意味で創作力がもたらすものということであるから、それもまた、ニコ

ライも認めているように、広い意味で想像力の産物と判断できる（§69-70, S.144f.）。

夢は想像であるという見方は、時代的にも地域的にも、広範に認められるものであろう。そして、ヴォルフ学派という圏域においても、一定の考え方が確認できる。

ヴォルフは『ドイツ語形而上学』のなかで、「夢は想像に他ならない」と述べていた。その起源となるものは知覚であり想像であるが、そうした表象全体が呼び覚まされるのではなく、それと何か共通している別の知覚や想像が呼び覚まされくる、という。これはまさに観念連合で、こうした連想には充足理由がないとヴォルフは考えていた[57]。

ゴットシェートは、『全哲学の第一原理』で次のように述べている。

> 「従って、夢は眠りと覚醒の間の中間的な状態であると言える。覚醒しているときの我々は判明で秩序だった知覚の状態にある。すべての知覚がお互いのうちに根拠をもっているからである。逆に、眠っているときは、心の中の明晰な表象でさえまったく停止した状態にある。夢は、明晰だが、秩序立ってはいない一連の表象で、これらは想像力の規則に従ってつながっている。それにもかかわらず、夢の部分部分が明晰なら、夢全体は判明なので、我々が夢の中で自分自身を意識したり、夢を覚えていても、何ら不思議ではない。」[58]

過去の知覚をベースにして想像力の規則に従って自然と紡がれてゆく連想というのが、夢についての共通理解だったことを窺わせる。

夢が想像力の原理に則った一連の連想だとしたら、出発点とその後の継起の形が問題になるが、ニコライもまた、何らかの知覚から出発し、想像力の原理で想像がつながっていくと考えている（§72-74, S.150f.）。夢の出発点を探るには、寝ている間の周囲の環境や身体の状態を考えるほかに、寝る前に考えたこと、見聞きしたこと、前の日に一日中したことなどを考えてみるといいと言われるが（§72, S.151f.）、ここで考えられているのは、のちに古典的な精神分析が無意識の契機と結び付くと考えた前日の思考の残滓とは異なり、一連の連想の出発点となりうるという意味で、寝入る直前の表象のことを問題にしていると思われる。また、夢の複合性として、寝入ったときの考えをきっかけとした一連の連想から、寝ている途中の音などで夢が変わって、別の系列の連想になるということが考えられている（§77, S.158f.）。こうした説明原理にとって、夢の錯綜した様相は、想像の原理で表象が入れ替わることと、想像のきっかけになるものが新たに挿入されることとに還元されると思われる。

夢の内容は、夢が想像であり、想像が過去の知覚である以上は、日頃の知覚傾向に左右される、と考えられている。憂鬱質、多血質、胆汁質、粘液質という気質ごとに、見る夢や夢のなかで陥る情念に、いつもながらの傾向がある。寝ている時間の長い小さな子供は、あまり夢を見ないと言われ、妊婦は、通常と異なる知覚を有しているので、いつもとは異なる夢を見ると言われる（§80, S.162f.）。

夢もまた想像であるから、身体との関係は、想像力の身体への作用についての議論が適用されることになる。一般の表象と同じように、好ましいこと、好ましくないことを鮮明

に表象すれば、情念が揺り動かされ、それが睡眠中の様々な身体反応となって表れる（§76, S.157)。もっともニコライは、さらに夢から健康や病気について推定することには否定的である。一つの知覚から多様な夢が発生して、その関係がすでに一義的ではない。夢の内容からその夢をもたらしたものへと一義的に解釈することが原理的に疑われ（§79, S.160f.)、「医学的な夢解釈は・・間違いであり、根拠がない」（§79, S.162)、と明確に述べられている。

広義の想像力が産み出す夢と身体とを関係づける延長上で、ニコライは「夢魔（Alp)」の問題を取り上げている。Alp という名詞には、「妖精、夢魔」という意味と、「悪夢、胸苦しさ」という意味がある。グリム兄弟のドイツ語辞典を見ると、「悪意のある夜の悪魔」、「寝ている人、夢を見ている人に乗って、押さえつける」といった記述が見られ、悪夢は魔物と関係しているという古くからの考え方が窺われる[59]。英語で悪夢を意味する nightmare という語は、ドイツ語では Nachtmahr だが、Mahr は悪魔を意味する。西洋では、生理的反応という観点から、悪夢は夢と区別され、睡眠中に恐怖を与える夢魔の仕業に帰せられてきた。フューゼリ（1741-1825）の「夢魔」の絵は、そうした観念を形象化してよく表している。ニコライは次のように書いている。

「覚醒中に夢魔（Alp）に押さえつけられる人はいない。こうした目に遭うのは眠っている人だけで、しかも、しっかり眠っていなくて、眠りが非常に浅い、まどろみの場合だけである。本当のところ眠っているのか起きているのか、分からないことがしばしばである。さらに経験が教えるところによれば、胸苦しさ（Alpdrücken）は夢を見ている時だけに起こる。胸苦しさと結び付いている夢は、経験した人の話によれば、恐ろしくてぞっとするような夢だという。・・現れたものに手足をしっかり捕まえられる者もいれば、胸を抱きかかえられて押しつぶされ、さらに首を締め付けられたりする者もいる。・・危害を加える化け物を手足で突こうとしても、身体が動かない。・・助けを呼ぼうとするが、それができない。喉が締め付けられているように感じる。ひとことも言葉を発することができない。胸が外から押しつぶされているような、巨大な重荷か他の化け物かが上に乗って押しつぶしていて、それで息ができないような、そういう風にしか感じられない。・・不安が最大になったとき、目が覚める。・・身体を動かせるようになると、あるいは、手足の一つだけでも動かせるようになると、夢魔は消えてしまう。再び息ができ、話したり叫んだりできるようになる。こうした発作に初めてあるいは初めてでなくても稀に出会った人は、実際に悲惨な叫び方をして、家中の者を起こし、呼び集めようとする。駆け寄って灯りをつけ、夢魔をくまなく探して回るが、夢魔はとっくに逃げおおせている。こうしたことが起こった人を観察すると、大きな危険に遭ってそこから逃れた人によくあるような、激しい心臓の鼓動に気付く。手足全体が疲れて重く、打ち砕かれたかのようだと訴えていて、中には実際に、次の日になっても、あるいは数日間、主として腕や胸に茶色や青のあざが見られることもある。」（§83, S.171f.)

こうした現象に対して、ニコライはまず古来からの解釈を検討する。その説明によると、無知と迷信の時代である古代には、説明できないことは魔物のせいにされ、夢魔やその他の名称が与えられた（§84, S.175f.）。夢魔が何かについて異教には、キューピッド、夜の鳥、森の悪魔だとみる説があり、また、神が生物を創ったときに早く安息日になりすぎて不完全なままに終わった被造物が夢魔とするユダヤのラビもいた。数世紀前のキリスト教会には、魔女や悪魔自身が夢魔だという考えがあり、人間と悪魔の子をもうけるとされた。ホメロスやアリストテレスも、父親は悪魔だと主張された。そうして魔女裁判が続いてきた歴史にニコライは非難の言葉を向けている（§85, S.176f.）。理性的な医師が、夢魔の現象が自然に起こりうると考えて、自然な原因によるものと悪魔や魔術と関連した超自然的なものとに分けたのち、ニコライの時代になって、夢魔を自然的要因による病的苦痛と見なす考え方に到ることとなる（§86, 179f.）。

ニコライはさらに、夢魔の医学的理解についても、歴史を追って語っている。古代の蒸気説では、状態のよくない血液や胃から生じた蒸気が高い位置に上り、脳と脊髄を圧迫することによって、身体の運動、とりわけ胸の運動に関係する部位への生気の影響が阻害され、それで身体が動かなくなる、と考えられた。ニコライは、脳への蒸気の上昇というのは根拠のない思いつきだ、と断じている。水に浮かぶ心臓というパラケルススの説も、愚かなものと批判される。この考えによると、仰向けに寝たときに心臓が容器の底に落ち、心臓の上に水が溜まって、それで夢魔が生じる。人間が立ち上がるか姿勢を変えるかすると、心臓が再び上に上がって水中に浮かぶので、それで夢魔は消え去る。近代の説としては、痙攣によって下腹部や胸部の筋肉が収縮し、それが呼吸を阻害するという説、背中の血管を循環している血液が暖まりすぎることが原因で、血液が肺の中に停滞することになって呼吸が妨げられるという説などが紹介されている（§87, S.181f.）。

こうした見解に対して、ニコライは夢という観点から、言い換えれば心身の相関という観点から、この夢魔の現象を説明しようとする。夢魔に襲われるのは夢を見ている時だけで、その夢は常に恐ろしい夢であることから、恐怖、不安、驚愕に陥ったとき夢魔の発作に到ると考える（§88, S.183f.）。ニコライは情念に固有の身体変化があるという立場なので、その立論からすると、恐怖を感じる夢にも、そうした情念に固有の身体変化が起こることになる（§89, S.184）。恐怖は全身の硬直をもたらすものなので、夢魔に襲われたという場合には、随意的な運動に使われるすべての筋肉に痙攣性の硬直が起こっているに違いない。それが夢魔の正体で、手足が動かないこと、呼吸ができないこと、胸が締め付けられること、動悸がすること、言葉が出なくなることなどは、すべてそこから説明される（§91, S.187f.）。この現象が長時間続かないのは、情念が強すぎて目が覚め、それによって恐怖心もその身体反応も消失するからである。手足が動くようになって夢魔が追い払われたのではなく、夢魔の現象が終わって、手足が動くようになるのである（§92, S.188f.）。そうした意味では、想像力がもたらした夢が身体反応を引き起こす現象と言えるが、ニコライはこのような夢のきっかけになる精神や身体の状態についても考察している。前日、特

に就寝前に頭にあった怖い考えがきっかけになりうるし、不規則な血液の運動による不快な知覚もきっかけとなりうる（§94, S.193f.）。夢魔に対するニコライのこうした説明は、従来からの俗説を排し、連想という想像力の原理に立ち入る手前ではあるが、哲学と医学の連携を図る自らの枠組みでもって論証する姿勢を貫いていて、啓蒙主義的な立論の典型例に見える。

それに比べると、夢遊症についての説明は些か控えめに映る。症例の紹介のあと、強い想像力が昼間に関わった対象を夢遊病者に鮮明に与えているのは確かで、その場合には身体運動も生じる、と述べられるが[60]、そうした行動を眠ったまま怪我なしにできる理由は分からないと率直に述べて、心は意識されなくても働くことができることを確認して議論を閉じている（§96, S.201f.）[61]。

9　思想史記述への示唆

ここまで、ニコライが依拠した表象心理学の構図、さらには、心身調和の構図を確認して、その上でそれを援用して展開されている幾つかの医学的事象の説明を見てきた。一般に、この時代の著作に対して、独自の議論はさほど多くないという印象をもつことがしばしばあるが、我々の現代の感覚からすると、ニコライの想像力論もまた、そうした印象を受けるテクストである。表象心理学の構図、心身調和の構図は、基本的にヴォルフ学派のものと言えるだろう。それを援用しての医学的事象の説明に幾らか個性を感じるが、主題や道具立てには時代の刻印がやはり色濃く感じられる。総じて、時代の定型の思考パターンが織りなされ、その織りなしの形に著者の立場選択を見出すという観がある。そうしたテクストの解釈に求められるのは、小さな独自性を特徴や進歩だと語る姿勢であるよりは、むしろ、思想史的な系譜の機微を見分け、思考の道具立てを吟味して、時代の共通認識が許していた思考の幅を検証しようとする姿勢ではないだろうか。そして、著者の立場選択は共通認識が許していた思考の幅における可能性の一つと見る読みの姿勢ではないだろうか。

本稿3章以降の各章の問題について、そうした検証は可能であるが、ここでは、結論に換えて、表象心理学においてニコライの立つ位置に触れておきたい。デュルベックは、ニコライの想像力論に関して、次のように述べている。

> 「『想像力の作用』についての著述においてニコライは、その心的モデルという点で、切れ目なくヴォルフ心理学に接続している。しかしながら、その表象のヒエラルキーは、バウムガルテンやマイアーによる修正で逆転されていた。感覚あるいは明晰でない混乱した表象は、ヴォルフの場合、上位の認識能力に従属していたが、今後は悟性の判明性にとって不可欠の前提と見なされるのである。・・こうした枠組みのなかでニコライは想像力を定義している。」[62]

ここまでの議論を踏まえれば、こうした総括は表面的なものに感じられる。ニコライがヴォルフ心理学に代表される悟性の能力論を取り入れているのは明白だが、さらにヒエラルキーの逆転を前提していたと示唆するのは的確な見方ではない。

表象能力のヒエラルキーというものが理論構築に先立つ立場選択として一貫して存在しているという評価は、行きすぎると疑似思想史的な幻想となる。個々の悟性能力の評価は、悟性の諸能力をどのような場面でどういう目的で活用するかという言説の場の構築にも依存している。論理学の図式に従って、概念、判断、推論という歩みを経て、真理をロジカルに導き出せるようになることが主題である場合と、表象の鮮明さという観点を軸に据えて情念の強度を問題にしている場合とでは、同じ悟性の能力論を前提的な図式としていても、力点が異なるのは当然と言わなければならない。ニコライがマイアーに接近して見えるのは、あるいは、実際に接近し得たのは、文脈上の背景があってのことと見るのが妥当であろう。

これは詩学史研究では70年代から、新興のヴォルフ哲学と伝統的な修辞学の対立図式という衣装で語られてきたことでもある。初期啓蒙主義時代の詩学がヴォルフ哲学を基盤とするようになっても、受容者への作用を問題にする場合には、情念の喚起が問われて、議論のベクトルが変化する。そうした変化が一つの詩学書のなかで表れるか、複数の詩学者の対立として表れるかは別として、それがヴォルフ哲学の悟性の能力論をめぐって存在していた理論的布置の幅なのである。

ニコライの場合、知覚とは現前する事物の表象のうちで意識されたものを言い、意識されるということは他と区別されて明晰ということなので、明快に知覚とは「現前する事物の明晰な表象」(EK2 §7, S.12) であるとされている。従って、デュルベックが言うような明晰でない表象でもない。そして、議論の早い段階で明晰さから鮮明さを導いているように (§4, S.8f.)、鮮明さという論点が事前に織り込まれての立論という観が強い。こうした「鮮明さ」にアクセントを置いた論理展開は、ヴォルフ哲学のマイアー風アレンジと見ることができる。こうした点に関して、デュルベックはこうも述べている。

> 「マイアーへの決定的な結びつきは、知覚と想像の混同という点に表れている。こうした事例は、再現において通常は弱くなる表象が現実の知覚と同じように鮮明な場合に起こる。マイアー同様、ニコライは夢想家と狂人を区別する。夢想家は多少の想像を知覚と取り違えるだけだが、狂人はすべての想像を感覚的な印象と混同する。」[63]

確かに、ニコライの空想と狂気を並記した§53冒頭の記述 (§53, S.107) は、マイアーの情動論§130 冒頭の記述[64]に似ていて、マイアーは、情念が想像を鮮明にするため、「こうした好ましくない状態のすべては情念によって生じうる」[65]と付言しているが、それがヴォルフからの「決定的」な転換だと言うのはやや軽率に感じられる。デュルベックは書いていないが、知覚と想像の混同ということはヴォルフも述べている。

> 「想像は、知覚のなかに含まれていたものをすべて明晰に表象するわけではないので、想像には大いに不明確さがある。そしてその点で知覚と異なっている。それどころか、

そうした点を通じて我々は前者を後者から区別するのが常である。・・それにもかかわらず、想像だけがあるときは、より大きな明晰性を有しているように思われる。そのため、想像が知覚と見なされることもある。我々はそうしたことを夢で見出す。」[66]

これが時代のトポスであって、それにアレンジされたヴァリエーションがあるという感覚が妥当なものと思われる。

初版のテクストには、空想の起源は情動にあって、想像力の活発さが空想の原因であるという明瞭な文章が見られる（EK1 §24, S.100）[67]。しかし、病的な空想の治療例を紹介したその節の議論全体を読めば、あくまでの想像の表象としての強度が問題なのであって、デュルベックが物語るような、情動を基盤とした議論へと決定的に転換したというものではないことは自ずと理解される。そして、次の最終節では、その表象の強度ということが、「脳内の運動」の強度として語られ、運動の強度が変わらなければ、想像と知覚は一つになると言われているのである（EK1 §25, S.105）。総体的に見て、医師であるニコライには、医学と哲学を結び合わせて、身体と精神の相関を分節化するために、運動の強度と表象の強度を媒介する情念の強度という観念が必要になったのであって、それをヴォルフの地平からマイアーの地平への移行として語るのは、おそらくはバウムガルテンにおける近代美学の誕生という美学史の物語を意識した、事後的な再構成の産物に過ぎないように思われる。

思想史的な図式化が過剰となることで、見失われる細部もある。ヴォルフ哲学も、機械論と生気論との対立図式に当てはめて捉えられるだけのものではなく、身体を問題にする医学に対して精神の側の理論を表象心理学として提供し、心身の調和という観念を理論のグランドデザインとして提供し、さらには、厳密な学問的論証の規範的実例を提供するという多重的な役割を担っていたことが、ニコライのテクストから見て取れるのではないだろうか。

ニコライの言う想像力は、過去の知覚を蘇らせるだけでなく、過去の知覚をもとに観念連合をつくり出すこともできる。我々の身体活動は、過去に形成された観念連合に無意識のうちに支えられている。想像力は情念を喚起することもできる。気質として考えられていた特定の偏りのある観念連合を産み出す傾向性は、情念の固着をもたらすこともある。心身の調和という理論的枠組みのなかで、想像や情念は身体に作用し、医学的な問題圏に姿を現す。18 世紀半ばのこうした問題設定は、過去の特定の出来事が閉鎖的な観念連合をつくり出して情動を固着させ、無意識のうちに身体的症状を産み出すとした 19 世紀末の精神分析の問題設定と比較してみることもできるだろう。強い表象が弱い表象を覆い隠すとした表象心理学の命題は、意識される精神活動の奥に意識されない精神活動が存在するという精神分析の命題に対置できる。覚醒時には、知覚よりも弱い想像は陰に隠れて進行しがちであるが、夢では連想の系列が支配的と考えられ、その身体反応を観察することもなされた。そういう意味では、ヴォルフ哲学というパラダイムから離れることを、必ずしも上位と下位の認識能力の逆転という図式で語る必要はないのであって、心身を別の形で媒

介すること、意識されない精神活動を別の形で構造化することから、パラダイムの転換を考えることもできるように思われる。

---

[1] Ernst Anton Nicolai: Gedancken von den Würckungen der Einbildungskraft in den menschlichen Körper. Zweyte vermehrte Auflage 1751　以下では、この第２版を EK2 と記し、引用の際はパラグラフと頁数を書き添えるのみとする。誤解の余地のない場合は、さらに略記する。

[2] Gabriele Dürbeck: Physiologischer Mechanismus und ästhetische Therapie. Ernst Anton Nicolais Schriften zur Psychopathologie. In: Carsten Zelle(Hg.): „Vernünftige Ärzte". Hallesche Psychomediziner und die Anfänge der Anthropologie in der deutschsprachigen Frühaufklärung. 2001, S.104

[3] Oettinger は、例外的に、ニコライの生年を 1721年としている。Edouard-Marie Oettinger: Moniteur des Dates. Bd.14. Dresden/Leipzig 1876　vgl. Heike Elisabeth Lauer: Ernst Anton Nicolai(1722-1802) – Untersuchungen zu Leben und Werk, seiner Zeugungslehre und Auffassung vom Versehen der Schwangeren unter besonderer Berücksichtigung der Entstehung von Mißbildungen. 1996, S.3

[4] Lauer, a.a.O. S.8

[5] Vgl. Lauer, a.a.O. S.10

[6] 死亡日については、８月 18 日、８月 23 日と記述している資料もある。キリアンとクレーマーの資料でに、「1802 年８月 18 日に死亡した」とある。Hans Killian u.a.: Meister der Cirurgie und die Chirurgenschulen im deutschen Raum. 1951, S.131　vgl. Lauer, a.a.O. S.3

[7] また、こうした大学での経歴のほかに、ニコライはプロイセン王国、ワイマール公国など４つの宮廷の顧問官でもあり、それらの諸侯の侍医でもあった。想像力論第２版の表紙には、「プロイセン王国宮廷顧問官、医学博士、プロイセン王国フリードリッヒ大学公的員外教授エルンスト・アントン・ニコライ」と記されている。

[8] Allgemeine Deutsche Biographie 2. unveränderte Aufl. Bd.23 1970 (Neudruck der 1. Auflage von 1886), S.578f.

[9] 数学的方法への信頼と言われるものは、例えば、「脈拍の理論的および臨床的考察」（1746）という初期の論考の次のような、やや論争的な調子の文章において確認することができる。「私が思うに、脈拍の理論の前提にある基礎は、今日の自然学者、数学者、解剖学者のすばらしい努力に感謝すべきものである。古代の人々は、数学が教えてくれた正しい思考法をあまり知らなかったし、自然学について知っていることはさらに少なく、人体の構造についてはほとんど知らなかった。・・医学の綿密な論究には、覆ることのない基礎と、正しい思考法が求められる。前者を与えてくれるのが自然学で、後者は数学から得られる。数学や自然学と医学の結びつきが少ないほど、人体の観察は誤りの多いものとなる。確かに、すでに多くの学者が、数学や自然学を医学と結びつける努力をしてきたが、ほとんど後継者を得られないのがどうしてなのか、私には分からない。数学や自然学と医学の結合は、我々の時代にはまったく流行らないかのようである。・・しかし、きわめて真剣に言って、こうした変化のすべてについてその根本を、自然学や数学を理解することなしに、洞察することができるだろうか。いや、決して無理である。そのような医学者は、自らの命題の真理についてまったく何も認識しないし、確信の根拠についての認識はもっと少なく、そうした根拠がどこからくるかについての認識は最も少ないのである。」 Ernst Anton Nicolai: Theoretische und practische Betrachtung des Pulsschlages. 1746, Vorrede (unpag.)

[10] 『病理学』第１巻の序文には、次のような文章がある（ハレ大学所蔵の原典は未確認、引用は Lauer, a.a.O. S.21 に拠る）。「病気の原因についての知識は哲学的知識である。・・そこからヒポクラテスがこう述べたことは、まったく正しい。哲学を医術に応用し、医術を哲学と結びつけなければならない。」 Ernst Anton Nicolai: Pathologie oder Wissenschaft von Krankheiten. Bd.1 1769, Vorrede(unpag.)

[11] 例えば、次の文章は、想像力論のなかの一節である。「悪しきもの、よいものを数多く生き生きと表象するすべての表象は、我々の感情を動かす。ところで、夢は明晰な表象に他ならない。従って、夢もまた、悪しきもの、よいものを数多く表象する場合には、我々に情念を喚起するに違いない。経験もこれに合致する。というのも、経験が教えるところでは、夢を見る者は、悲しんだり、喜んだり、怒ったり、不安、恐怖、驚愕に陥ったりするからである。」（EK2 §76,S.157）　こうしたロジカルな論の運びがニコライの文体の特徴である。

[12] Lauer, a.a.O. S.22

[13] ibid. S.23

[14] ibid. S.7f.

[15] Dürbeck, a.a.O.

[16] Johanna Geyer-Kordesch: Pietismus, Medizin und Aufklärung in Preußen im 18. Jahrhundert. S.246

[17] Siehe Anm.7
[18] Friedrich Börner: Nachrichten von den vornehmsten Lebensumständen und Schriften jetztlebender berühmter Aerzte und Naturforscher in und um Deutschland... 3 Bde. 1749-1753　ヒルシュが挙げているのは、2巻372頁、3巻742頁である。
[19] Lauer, a.a.O. S.26f.
[20] Dürbeck, a.a.O. S.106
[21] Ernst Anton Nicolai: Wirckungen der Einbildungskraft in den menschlichen Cörper aus den Gründen der neuern Weltweißheit hergeleitet. 1744　以下では、この初版をEK1と記し、引用の際はパラグラフと頁数を書き添えるのみとする。誤解の余地のない場合は、さらに略記する。
[22] Siehe Anm.1
[23] 改版について、第2版の序文では、次のように述べられている。「この書は私が書いた最初のものだが、この新しい版ではまったく違った姿になっている。随所で改善を図り、著しく加筆しただけでなく、完全に改訂されている。この版を初版と比較する労を執る者は、私の言ったことが本当であると分かるだろう。その他に私は、この書を仕上げるに当たって、判明性と徹底性に留意し、哲学的方法の諸原理が要求するものすべてを守ろうと努めた。」(EK2 Vorrede, unpag.)
[24] ガイアー＝コルデッシュは、初版に対する1745年の書評を引用して、ニコライの論文の内容を的確に捉えていると評価しているが、その書評文はここに紹介した序文の後半を要約したものにすぎない。Geyer-Kordesch, a.a.O.
[25] Vgl. Christian Wolff: Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt (= Deutsche Metaphysik) 1751, S.111f. =Christian Wolff: Gesammelte Werke Abteilung Ⅰ, Bd.2. Nachdruck der [11.] Ausgabe. 1983
[26] ibid. S.112
[27] ibid. S.107
[28] Vgl. ibid. S.149　「感覚や、想像や、これから述べる他のすべての能力において、我々はそのうちの一つに向かい、他のものよりもより意識する、つまり、ある思考が他のものよりもより明晰性を獲得する、そういう能力を心のなかに見出す。それを我々は注意力と呼び慣わしている。」
[29] マイアーは1739年に哲学の修士号と教授資格を取得、1746年に員外教授、1748年に正教授となっている。
[30] Georg Friedrich Meier: Theoretische Lehre von den Gemütsbewegungen überhaupt 1744
[31] Georg Friedrich Meier: Anfangsgründe aller schönen Wissenschaft [Zwote verbesserte Auflage] 1754,55,59　初版は、Anfangsgründe aller schönen Künste und Wissenschaften 1748-50
[32] 1巻から3巻まですべて最初に「理論美学」と書かれた後に、何巻何部という名前が掲げられている。ほとんどが第1部（Der erste Hauptheil）だが、3巻の最後に第2部、第3部がある。第1部の第1章は美的学問、第2章は悟性の諸能力、第3章は美的な概念、判断、推論について論じている。第1部第1章第5節が「思考の鮮明さについて」の論述である。
[33] Wolff, a.a.O. S.130 und S.139　ヴォルフの想像力概念については、拙論参照。「クリスティアン・ヴォルフの心理学における「想像力」」、『ドイツ啓蒙主義研究2』(2002) 所収。
[34] Meier: Anfangsgründe aller schönen Wissenschaft, S.257　マイアーは、同じ箇所で次のようにも述べている。「我々のすべての表象は感性にその最初の起源を負っているが、それが想像力によって保持され持続性を得るのである。」
[35] Wolff, a.a.O. S.134f.
[36] Meier, a.a.O. S.258
[37] Meier, a.a.O. S.486
[38] 初版では、§2の最後で簡潔に述べられている。(EK1　§2, S.28)
[39] David Hume: A treatise of human nature. Vol.1, 1739 pp.23-31(sect.Ⅱ-Ⅲ)
[40] Wolff, a.a.O. S.134f.　「想像の規則」については、§238で次のように述べられている。「我々の感覚が我々に、別の時に有していた感覚と共通したものをもっている何かを表象させる場合、我々にそれが再び現れてくる。つまり、現在の感覚全体の一部がある過去の感覚の一部である場合に、過去の感覚全体が再び現れてくるのである。そして後者がまた、別の時の感覚や想像と何か共通したものを持っていたら、我々にはそれがさらにまた再び現れてくるのである。このような形で、想像は常に次々と入れ替わって現れる。」ibid. S.132
[41] すでにマイアーの情動論でこれとほぼ同じ議論がなされている。 Meier: Theoretische Lehre von den Gemütsbewegungen überhaupt S.105f., S.236f.
[42] Wolff, a.a.O. S.471f.
[43] 「そればかりか、心に対して、身体を動かす隠された力を認めている者もいる。一般の人がもっているこのような考え方は、また長い間、哲学者の間でも広まっていた。しかしながら、今日ではそのような考

えに賛同する者はあまりいない。身体における心の作用および心における身体の作用は、一方の他方に対する自然な影響と呼ばれてきた。それゆえ、身体と心の協調は、一方の他方に対する自然な影響に基づいていると主張される。身体における心のこうした影響や、心における身体のこうした影響は、理解することができれなければ、悟性的な仕方で説明することもできないということは、容易に認められてきたところである。しかしながら、こうした影響は経験に基づくと思いこまれてきた。私は先にすでに、身体は心において、そしてまた心は身体において作用するということを経験から証明することはできない、と説明した。従って、身体における心の自然な影響も、心における身体の自然な影響も、どのような根拠もなく単に長い間仮定されてきたにすぎないとしか言えないのである。」ibid. S.472

44 ibid. S.472f.

45 ibid. S.475f

46 ibid. S.480

47 Ernst Anton Nicolai: Abhandlung von der Schönheit des menschlichen Körpers 1746, S.56f. vgl. Alexander Košenina : „Es leihe [...] Trost der männertollen Dirne". Beiträge über Nzmphomanie aus dem Umkreis von Ernst Anton Nicolai In: Carsten Zelle(Hg.): „Vernünftige Ärzte" 2001, S.122

48 Ernst Anton Nicolai: Gedancken von Thränen und Weinen 1748, S.85 vgl. Košenina, a.a.O.

49 因みに初版には、空腹感は不快な知覚をが伴い、それによって我々が栄養補給の義務を果たすようになっていると説明する下りで、自らがシュタール学派の敵ではないと断っている文章も見られる。「これは、我々に義務を守らせるために、自然が用いる手段なのである。・・少なくとも、心が多大な熟慮によって空腹や喉の渇きを喚起するとは想像できない。・・しかし、このことを私がシュタール学派の方々を非難するために挙げたかのごとく、責めることはしないでいただきたい。いや、決してそうではない。私がこの学派に抱く敬意は、私には負いきれないほど多大なものである。しかも私は、空腹や喉の渇きを空想から説明しようと考えている。そうする者は、変化を心から導くことになる。従って、私がシュタール学派の方々の敵陣に属していると考える必要はないのである。」(EK1 §7, S.44f.) ニコライが生気論と機械論の間の論争を意識していたことを示す文章ではあるが、第2版の対応する箇所 (EK2 §97, S.202f.) にこの文章が見られないことを過大視する必要はないと思われる。予定調和を掲げる哲学に矛盾なく接合しうる立論なら、そもそも生気論か機械論かという問いに関わらないという立場選択も可能と言うことができる。Vgl. Dürbeck, a.a.O. S.109

50 そのうち3例は初版でも挙げられている (EK1 §24, 101f.)。ただし、ブールハーフェの名前はなく、ハラー自身がそういう男性を目にしたという紹介の仕方になっている。

51 Dürbeck, a.a.O. S.112f.

52 ニコライは、空想や狂気にも脳の状態に起因するものがあり、そうした身体的な要因によるものは、その要因を取り除かない限り解消できないとしている。(EK2 §59, S.123)

53 Dürbeck, a.a.O. S.112

54 Ernst Anton Nicolai: Gedancken von der Erzeugung des Kindes im Mutterliebe und der Harmonie und Gemeinschaft, welche die Mutter während der Schwangerschaft mit demselben hat 1746

55 Vgl. Gabriele Dürbeck: Einbildungskraft und Aufklärung. Perspektiven der Philosophie, Anthropologie und Ästhetik um 1750 1998, S.156f.

56 ニコライは、神経が繊細な人は知覚が鮮明なので想像も鮮明で、妊婦は特に繊細だとしている (EK2 §16, S.28)。

57 Wolff, a.a.O. S.133f.

58 Johann Christoph Gottsched : Erste Gründe der gesammten Weltweisheit. 1762 (Ausgewälte Werke Bd. V/1 Hg.v.P.M.Mitchell 1983, S.570)

59 Jacob u. Wilhelm Grimm: Deutsches Wörterbuch Bd.1 1854 (Nachdr. 1991), Sp.245

60 現在の研究では、レム睡眠ではなくノンレム睡眠から起こるため、夢遊は夢の内容がそのまま行動に出たものとは考えられていないようである。 堀忠雄編『不眠』1988年、115頁以下参照。

61 テクストでは、200頁、201頁が誤って202頁、203頁と印刷されている。

62 Dürbeck, a.a.O. S.109

63 Dürbeck, a.a.O. S.110

64 Meier: Theoretische Lehre von den Gemütsbewegungen überhaupt S.200

65 ibid. S.201

66 Wolff, a.a.O. S.130f

67 それがパラフレーズされた第2版でも、情念 (Leidenschaft) に捕らわれると我々はほとんど状況を考えないので、想像が非常に鮮明になり、そうした情念が人を空想家にする、と言われている (EK2 §58, S.121f.)。